

## 山東東平洪頂山北朝摩崖刻経拓本

大内文雄(教授・東洋仏教史学)

中国仏教に特有の文物に、膨大な数量の石刻經典(以下、刻経と略称)がある。文字通り經典を石に刻み、その永続を願ったものである。古くから知られていた刻経としては、山東省泰山・経石峪の金剛般若経や、河北省の響堂山石窟・房山石窟の多数の經典類があったが、新中国成立後、これら以外にも新たに発見されたり、再確認がなされて、山東・河北のほか、それらの分布域は、山西・河南、そして四川にまで広がっている。時間的広がり而言えば、6世紀半ばの北齊時代より、15世紀初めの明代初頭にまで及ぶ。これらの中、最も初期に位置するのが北齊代の刻経群、時間的広がりと言及数量の両面において最大のものが房山の刻経群である。ここに紹介する山東・洪頂山(泰山の西方約60km)の摩崖刻経は、北齊代刻経の最初期に措定され、それだけに中国仏教史研究の上にも重要な意義を有している。

洪頂山刻経の一特徴は、字形が極めて大きいことである。最大の「大空王佛」題名(写真1)では、「大」字が縦約160cm、横約350cm、以下これに準じ、全体で約930cmある。急角度の崖面に縦に刻まれ、文字通り見上げるよりほかない巨大さである。洪頂山刻経の全体の配置は、東の洪頂山を背にして西方の東平湖に向けて小渓谷が形成され、その右(北嶺)と左(南嶺)の急峻な崖面に、節略された經典や仏名、あるいは題記・銘文等が刻まれている。前記「大空王佛」は北側にあり、今は字の上が白く塗られているために、谷を挟んだ南の刻経側からも遠望できる。

刻経の形態は、大別して摩崖・石壁・碑板に分けられる。摩崖とは文字通り、自然の崖面、あるいは巨石面に刻字されたものでおおむね大字が多く、石壁とは壁面を平滑に磨いた上に刻まれ、こちらは小字が多く、石窟内に残されたものがそうである。碑板は石板、あるいは石碑に形成され刻まれており、房山では刻経の初期のものを除く大部分が石板による。洪頂山を含む山東省の刻経は、先程も述べた泰山を代表例として摩崖が多い。鄒県に属する所謂四山摩崖(鉄山・葛山・崗山・尖山)の他、徂徠山、嶧山等である。しかし洪頂山を除くこれらが古くよりよく知られていたのに対し、洪頂山の刻経はごく最近、1995年にその存在が公表されたもので、従って通常用いられる金石書類には著録されていない。一方でこれら一連の刻経類の書者、書体等に共通項が多いことも指摘されている。



写真1



写真2

それらは北齊時代に集中して造られ、また北周武帝による北齊併合に伴う廃仏政策の実施期間を通過した北周末期がそれに続いているように、ほぼ時期的にも一致している。

洪頂山摩崖には仏名が多数刻まれており、中でも「大空王佛」の仏名が、本学に所蔵された拓本の中に四例を数えるように、他地域の摩崖刻経にも散見するものの、前述したその巨大さと共に洪頂山における一特色となっている。仏名の中には、16の仏名を横一列に820cmもの長さにわたって列記したものの(写真2)があり、巨大な「大空王佛」の「佛」の字に仏手が刻まれていることと共に、これら仏名が經典の石刻とは別次元の、信仰・礼拝の対象であったことを想起させる。

洪頂山摩崖に刻まれた經典は摩訶般若波羅蜜經や大集經(写真3)あるいは仁王般若經・文殊般若經である。これらや仏名には題記が付加されているものがあり、また単独の銘文も存している。これらによって洪頂山摩崖刻

経事業の中心人物が安道壹(安道一)、あるいは法洪という僧であったことが判明する。中でも安道壹の名は鉄山や尖山にも見られ、いずれも「大沙門僧安道壹」等と刻まれており、現在最も注目されているが、他の記録に現れない人物である。しかしこの人名については聊かの疑念が生じる。中国でも日本でも、現在の表記は「安道壹」で統一されているが、俗姓と法名を併せて名の例は、当時、具足戒を受け公式に認められた僧には通常見られないものである。例外は正史等の記録に現われる宗教叛乱の首謀者名であろう。あるいは例外の範囲を広げれば、高僧伝等の記録に載りにくい私度僧、民間遊行の僧尼が含まれるであろう。本学所蔵拓本の「僧安道壹」碑銘(写真4)に言う「大沙門僧安、又、道壹と名づく」から判断すれば、僧安、別名道壹となる。但し、尖山の題名に「大都経仏主大沙門安道壹」ともあるので、更に検討が必要である。洪頂山摩崖刻経に関しては、桐谷征一氏による、一連の現地調査を踏まえた精密な研究が参照すべきものとして先ず挙げられるが、田熊信之氏の研究も、従来、安道壹に関わる記録が皆無であるとされてきた現況に、一石を投ずる視点を提供するものである。少なくとも桐谷氏が言われるように、洪頂山摩崖刻経は、漸く書道史研究上の対象から離



写真3



写真4

れて、中国仏教史研究に欠かせぬ重要史料として位置づけられつつある。

洪頂山摩崖刻経に関しては、昨年8月に山東省済南市において、同省石刻芸術博物館の主催のもとに山東に分布する北朝刻経に関するシンポジウムが開かれたことも特筆されるできごとと言えよう。しかし、現在、最も注目されるべきは、中国における仏滅年代論と末法思想に関わる記録が、洪頂山の題記・碑銘の中に見られることである。

最大の刻字を持つ「大空王佛」題名は、その左下に題記(写真5)を持ち、そこに「釈迦雙林後一千六百廿三年」の一文が刻まれ、また「安公之碑」銘文(写真6)にも「鬘林後千六百廿年」と記されている。更に「僧安道壹」碑銘(写真4)にも「鬘林園一千」とある。洪頂山摩崖刻経の中では「釈法洪」碑銘(写真7)に「大齊河清三年」の紀年が残され、洪頂山刻経の下限は、北齊武帝の河清3年(564)であることが判明する。従って仏入涅槃後1620年、1623年とはそれぞれ北齊文宣帝の天保4年(553)、7年(556)に当り、これはまた南岳慧思の「立誓願文」に言うところの算出規準と一致する。以上は前記田熊、

桐谷両氏が指摘するもので、「立誓願文」の慧思真撰説を強く支持するだけでなく、末法思想が中国に伝播した時期を遡らせる明確な証明とされている。これらの既に提出されている論点についても今後一層の検討が必要である。

本学所蔵のこれらの拓本は、上記のような観点からも中国仏教史研究上に貴重な情報を提供するものであるが、今一つの指摘を行えば、その稀少性にある。桐谷氏の最近の論文(「北齊大沙門安道壹の刻経事跡」大崎学報158号)にも述べられているように、これらの摩崖刻経は、その石質の脆さと風化に伴い、最初に公表がなされてからも剥落が進み、判読できない部分が増えてきている。本学に収蔵された拓本にも当初の拓本、録文と比較して採拓字数が少なくなったものがある。しかし題記・銘文等の小字はもとより、経文、あるいは大字仏名においても、肉眼での判読に困難を覚え、拓本に頼らざるを得ないのが現状であり、また早晚剥落も進んで行くのであろう。石刻経典の最初期に位置するこの洪頂山摩崖刻経拓本は、以上からも稀少性を持つ貴重な史・資料と言えよう。



写真5



写真6



写真7